

## 紫式部の宮仕え生活と源氏物語

——人間関係をめぐって——

森 一 郎

—

藤原道長の娘中宮彰子に仕えた紫式部は、「うきよのなぐさめには、かかる御前をこそ、たづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく、よろづわする」ほどであったが、彰子の後宮の文化的雰囲気的なさというものに、おさえがたい失望を感じていたようである。

時の権勢をにぎった道長は、わが娘彰子の後宮の文化的顕栄をはかるべく、高名な女流文人の出仕をうながした。紫式部、赤染衛門、和泉式部等の出仕はみなその一連のものである。彼女らはそれぞれに既にその名をなしていたようである。紫式部は、夫宣孝の死んだ長保三年（西暦1001年）から寛弘四年（西暦1007年）の年の暮の中宮出仕までの約七年の間に執筆した源氏物語（現在の源氏物語の一部。）で文名をあげ、それゆえに出仕をうながされたと見られるし、和泉式部は、その艶名と歌人としての天才を、出仕前に既に高名なものとしていた。

が、これらの高名な文質高き女流文人が、彰子の後宮の日常生活において、その文才を発揮したとおぼしき徴証が見当らぬ。かの定子中宮のもと、生き生きとのびのびとその文学的個性を発揮しえた清少納言の面影を、この彰子の後宮のどの女流文人にも見出しえないのである。

かの枕冊子に比すべき後宮観察記録たる紫式部日記には、むしろ紫式部の文才、個性は自抑せしめられ、表面単に「おいらかなる女房」としてすごすことを余儀なくされている彼女のにがにがしい表情がうかがわれるのである。彼女の文学的個性は内攻的にくすぶりつづけ、後宮生活の日常に発揚せ

られることはなかった。

紫式部日記がいかなる動機によって書かれたものか、その成立の事情は判然としていないが、全篇、道長や彰子に対しては讃仰の筆緻でつらぬかれていることは確かである。が、それとともに、清少納言の枕冊子のように躍動的に明かるい後宮記録でないことも明らかである。

その理由を、単に清少納言と紫式部の性格の相違のみに帰すべきでなく、実に、彰子の後宮内部の実態に求めることも重視せねばならないと考える。

紫式部は、齋院の中將の君の書簡を刎上にのせて、齋院方に対してはげしく反撥するが、どうも負け犬がほえているようで、だんだんその筆は齋院の長所をうべない、中宮方の短所を認めるはこびになっていく。

これを紫式部の自己批判性、中宮方の欠点をも認める公正な態度、人間理解の客観性、周到性等々、物語作家の偉大性と結びつけて紫式部の人間像を称揚するのが一般のようである。

それらの式部の偉大性自体を否定するわけではない。が、ここの文章が、齋院の中將の君の書簡を刎上に齋院方にはげしく反撥するかまえでありながら、結局、中宮方の批判へと帰結するのは、式部のほんとうの意図が、中宮の後宮の批判にあったのだと考えられないだろうか。それは、式部の自己批判でも何でもなくて、おさえがたい不満をうちまけた文章なのではないか。わたくしは、そう読むのが、ここの文章構成に即した自然な受け取りかたではないかと思うのである。

齋院方を批判するのはそのための導入なのである。あえて言ってしまうえば「敵は本能寺」なのである。齋院方を批判するのはひとつの文体のかまえにすぎない、いわば方便なのだ、と言っては言い過ぎになるであろうか。

女房たちの容姿をつぎつぎに批評して心ばせの問題へと移っていった自然な筆のはこびが、齋院と中宮御所の比較という設定をかまえていくところにはひとつの飛躍がある。双方の女房たちの心ばせが主題として取りあげられているところには、自然な筆緻をうなずかせるものがあるが、齋院と中宮御所の比較という設定はやや唐突といわなくてはならない。

女房たちの心ばせを論ずるなら、別に齋院をひきあいに出さずとも、一直線に中宮の女房たちの批評をつづけていってもよさそうである。ところが何故そうしなかったか。そうできない理由があったのである。それはこうである。容姿の批評の前おきで「すこしもかたほなるはいひはべらじ」と言って、欠点のある人は避けて、美しい人、好意を寄せた人のみをあげつらった。ところが、心ばせという点で、中宮御所の女房たちは、式部にしてみれば、欠点の方が多く眼についたのだ。長所はあまり眼にうつってこない。それで一直線にすすみにくい。が、彼女の人間観察者としての作家の眼は、心ばせの問題に最も強くそそがれているがゆえに避けて通ることはできない。というより、これこそが彼女の書こうとする眼目であり、書くことは彼女にとって内的必然であった。だが、その内的必然のままに一直線に文章をつづけるという単純な文体は、事が中宮御所の女房の批評であるがゆえに、中宮御所内での対人関係に神経質な警戒心をはらっている式部にとってゆるされることではなかった。そこで、兄惟規の愛人であった齋院の中将の書簡を祖上に、齋院の中将を攻撃目標にするという形態の下に（もちろん、齋院の中将を批判するということはやってのける）、いつしか、それと関連してという形で、わが中宮御所の女房批判へと筆を移し、むしろそれに質量ともに大きくウエイトをかけながら、形態としては、齋院の中将および齋院方批判というたてまえをくずさなかったのである。齋院の中将批判は偽装だとまではいわないが、中宮方の女房批判の導入部たらしめられているということは、文章構成においてうべなわれてよいであろうと思う。

女房たちの容姿を批評した部分をはじめとして、あとの和泉式部、赤染衛門、清少納言、左衛門の内侍などへの人物批判が個々の人物批判なのに対して、この齋院の中将のばあいだけが、彼女個人の傲慢さを批判してはいるものの、そこから齋院方全体への批判および中宮方の批判へと、両者比較の論へ展開されていることは、特に中宮方批判のウエイトが質量ともに大きいことともあいまって特異といわなくてはならない。前に齋院と中宮御所の比較という設定はやや唐突だと言ったが、個人批評がつらなっているなかでの、

この異質性を指摘するわけなのである。

私信を刼上にのせるということの式部の表現心理はどのようなことであったのか。信書の秘密をやぶるということの非倫理性をいう近代的立場からあげつらうのではない。が、それにしても、他人にあてた私信を刼上にのせるということは相当にどぎつい行為であるといわなくてはなるまい。いわゆるえげつない行為であり、品位ある行為とは言えない。式部にはそういう一面もあったのだ、と考えてさしつかえあるまい。清水好子氏は、「『思いぐまなき人』であるにもかかわらず、自分のすることには寛大なのである」と論評されたのであった。<sup>1)</sup>が、それはそうとしても、そういうえげつない行為が、自然な式部の行為であり、そのことじたいが、やむにやまれぬ、自然にわきあがった表現行為であったかとなると、わたくしはうたがわざるをえないのである。それは式部の人間性弁護のためではない。どうもこの表現行為には意識的にしくまれたものがあると思うのである。ではその表現意図、表現心理はどういうことであったか。式部の表現意識をさぐってみると、——わたくしはこれを次のように推測するのである。すなわち、私信を刼上にのせたのは確実な証拠を示したのである。齋院の中将という女房はこんなことを言っただけで齋院方をほめ中宮方を軽蔑しているのですよ、と、読む者の関心を確実にひきつける。そして式部の公憤を印象づける。これで、中宮方批難の犯人は齋院の中将だというたてまえが確立する。つまり、確実な証拠を示して齋院の中将の犯罪性を強調するに効果があり、読む者は齋院の中将を敵視する。式部の思うつぼである。そうしておいて、自分の中宮方批判を展開するのだが、そこで、自分が批判しておきながら、「これらを、かくえりてはべるやうなれど」と、こういう点をそんなふうに齋院の中将は特にとりあげているようですが……、といったふうに批評の主をいつの間にか中将にすりかえてしまうのである。ずるいと言わざるをえない。この文章は屈折していて、批評の主を中将にすりかえたあと、中宮方の女房たちの気風の弁護にまわっている。つまり、自分が批判したことを自分で逆に弁護する、まこ

註1) 「紫式部論」(『日本文学』昭和35年7月)。

とにややこしい文体である。いちじるしく韜晦的な文体である。そして「ただおほかたを、いとかく情なからずもがなと見はべり」と、ちょっぴりつけ加えて真意をのぞかせるといったぐあいなのである。ここは中宮方の女房個々をでなく、中宮御所ぜんたいの気風を批判しているから、こんなふうには、式部としては、できるだけ自分の意見をやわらかく印象づけるように、自己防禦の筆となったのだと考えられる。

和泉式部ら個人に対する批評が相当に峻烈で、よどみがないのに比して、まことに晦渋な筆緻であるゆえんだらう。

## 二

さて、式部は齋院の中将の書簡に反撥しつつ、齋院の風流・風雅な生活を肯定し、彰子の後宮の世俗的で何かと落ち着かない環境を指摘し、齋院のように風流一途にはなれないのは、この環境のせいで、こちらの女房も齋院のようなところに仕えたら、風流、風雅の点で劣りはすまい、と言っている。

これは、中宮方の女房弁護の筆がかえって中宮御所を批判することになっている。語るに落ちたのだろうか。そうではなく、これは、紫式部の「計算された文体」なのだ考える。すなわち、表はあくまで中宮方の女房弁護でありながら、内実はいつのままにか中宮御所の気風を批判するようにしくまれている文体なのである。

「きしろひたまふ女御きさいおはせず」——既に皇后定子は崩じており、彰子の後宮は競争者なきための精神のゆるみがあるという。精神の快き緊張が作り出す生活のはりのようなものが、彰子の後宮には欠けていたのである。

上臈・中臈の女房は引込み思案がすぎる、貴婦人ぶってばかりいる、これは中宮様のためにならない、見苦しいと思います、と式部自身が批判している。またあとの方でも、上臈の女房たちの子供っぼさはまるで姫君時代のままで、女房としての宮仕えの自覚がない、と批判している。道長は、かなり上流の姫君を彰子の後宮に出仕せしめたのだが、高貴の姫君の宮仕えぶりのあきたりなさ、何か生き生きとしないさまがあまりにも目立っていたのであろうと思われる。高貴な姫君を出仕せしめた道長の方策は、彰子の後宮を

かえてまずいものになっている。式部はそのことを指摘していることになる。そんなふうで、彰子の後宮は無風流、没趣味で、生き生きとせぬ気風であったことが確かである。「ただおほかたを、いとかく情なからずもがなと見はべり」——こんなに無風流でなくありたいものだ——というのが式部の底意であることまぎれもないのであった。

中宮彰子が積極的にリーダーシップをとる人でなかったこと、そのうつわでなかったことが何より大きな原因であったようである。中宮様は内気すぎて、自ら指図なさらない、無難主義なのだ。式部は指摘し、子供っぽい頼りない女房たちが、その中宮に迎合しているうちに、こういう気風になったのだ、と言い切っている。これはかなり率直に中宮彰子その人を批判している文章といわなくてはならないだろう。「ただことなるとがなくてすぐすを、ただめやすきことにおぼしたるみけしきに、うちこめいたる、人のむすめどもは、みな、いとよう、かなひきこえさせたるほどにかくならひにけるとぞ、心えてはべる。」という式部の文章は、彰子その人およびその後宮の気風の消極性を鋭くついている。

清少納言の枕冊子に見られる、定子の指導力のすばらしさは、まことに格別のものがあつたが、彰子は相当に見劣りするのである。また、このときの齋院というのが、大齋院選子と呼ばれた方である。齋院の中将は「歌などをかしからむは、わが院よりほかに、たれか見知りたまふ人のあらむ、世にをかしき人のおひいでば、わが院こそ御覧じ知るべけれ」と誇つたが、式部は齋院の女房たちに反撥的言い方こそすれ、齋院その人のすぐれていることは、はっきり肯定している。齋院の中将の言ったことに対して「げにことわりなれど」と一応肯定しているのであり、反論はしても女房を対象としており、「院はいと御心のゆゑおはして」と述べているのである。

定子や大齋院は後宮の文化的指導者であつたが、彰子はそうではなかつた。定子が清少納言をリードし、相唱和して文化的雰囲気、風流風雅の生活をづくりあげたのに対し、彰子は紫式部、赤染衛門、和泉式部等をリードできなかった。

式部は彰子を内気すぎるといふふうの評してはいるが、唱和して文化的雰囲気、風流・風雅の後宮生活をつくりあげられないものたりなさを感じていたのであろう。

中宮御所は「ことにをかしきことなし」と、殿上人らは思いもし言いもししているという。風雅なことを話しかけられて、応答を恥ずかしくない程度にできる人が全く少なくなってしまった、と殿上人たちが言っているようだ、と式部は書いている。日常生活の芸術化、「香炉峯の雪いかならむ」と問いかけて、さっと御簾を高くかかげてみせる、といった機知にあふれた文雅の生活は、この彰子の後宮にはないことを、式部は不満に思っている、と見てよいであろう。殿上人たちが言っているようです、と言い、「みづからえ見はべらぬことなれば、え知らずかし」と言うのは、責任のがれのおぼめかす筆にすぎない。彼女の真意は明らかに察せられる。

こうした環境であったから、式部のごとき文学の才能をもって出仕せしめられた者にとって、その個性を後宮の日常生活において明るく生かすことは困難だったのである。

俗っぽい後宮の雰囲気は、例えば左衛門内侍のごとき俗物が式部の神経をいらだたせた。帝が式部のことを「この人は日本紀をこそ読みたまふべけれ、まことにぎえあるべし」とおほめになったのを羨望嫉妬し、式部のことを、とても学問があるんですって、と言いふらし「日本紀の御局」というあだ名をつけて、式部を衆目の前にきわだたせるという意地わるをしたのである。後宮の口うるささ、わずらわしさについて式部がいかにかデリケートに感じとり観察していたかは、紫式部日記の各所にうかがわれる。清水好子氏は、低級なあつかましい神経、したたかな神経の持主の女の集団、というふうに言われ、諸例を紫式部日記の中からあげられて鋭く指摘された。<sup>1)</sup>氏のあげられた諸例と重なる点も多いが、論述の都合上、わたくしなりに分析しておく。

わるい着物を着ていると、仲間の女房がつつきあって笑う。殿上人までが批判的にじっと見つめる。率直に批判するのではない。批判して向上をはか

註1) 「紫式部論」(『日本文学』昭和35年7月)。

る善意があるのではない。嗜虐的な慰みとするばかりなのである。

「少将のおもとの、これらにはおとりなるしろがねのはくを、人々つきじろふ」。このさげすまれている古参の女房を、式部は仮借なく記録したのであった。

「その日の人の装束、いづれとなく尽くしたるを、袖口のあはひわろう重ねたる人しも、御前のもの取りいとて、そこらの上達部殿上人にさしいでてまばられつることぞ、のちに宰相の君など口惜しがりたまふめりし」。袖口の色の取りあわせのちょっとした失態までも批評されるのであった。

女房というものは公卿の慰みの対象であつたらしく、酒を飲まされ酔わされて、あらぬことをおしゃべりして公卿たちの興を買うというふうなことがあった。酔った公卿たちの戯れに乗ぜられて、あらぬ失態を演じてしまうのである。「こまのおもとといふ人の恥見はべりし夜なり」というのはそういうことであつたらしい。<sup>1)</sup>

車に乗るにも席次があつて、ちょっとした無造作もわるく思われる。「つぎにうまの中將と乗りたるを、わろき人と乗りたりと思ひたりしこそ、あなことごとしと、いとどかかかるありさま、むつかしう思ひはべりしか。」

わずかなことにも格差をつける貴族社会の身分意識。宮仕えのわずらわしさは実にこのような日常の生活のいたるところに感じられるのだが、こうしたことには女房たちの女性特有の心のせまさ、女性心理のあやなす要素が大きかった。

「扇などみめには、おどろおどろしくかがやかさで、よしなからぬさまにしたり、心ばへある本文うちかきなどして、いひあはせたるやうなるも、心々と思ひしかども、よはひのほど、おなじどちのは、をかしと見かはしたり。人の心の、思ひおくれぬけしきぞ、あらはに見えける。」

趣向の競争が拮抗して同じものになるというところに、「人の心の、思ひおくれぬけしきぞ、あらはに見えける」のであった。

こうした後宮の女房たちのはげしい競争の世界から式部は一步しりぞいた

註1) 日本古典文学大系「紫式部日記」460頁 頭註11参照。

ところにいる。物語作者らしい観察者の眼と評することもできようが、こうした競争には直接参加することのない、年とった女房である式部の位置を思いやらねばならぬであろう。

「夜ふくるままに月いとあかし。『格子のもと、とりさげよ』と、せめたまへど、いとくだりて上達部のゐたまはむも、かかるところといひながら、かたはらいたし、わかやかなる人こそ、ものの心しらぬやうにあさへたるも、つみゆるさるれ、なにか、あざれがましと思へば、はなたず」。年長者意識からくる慎重さというものである。若くはない、三十すぎの、いわゆる「さだすぎた」（「さだすぎぬるをかうにてぞかくろふる」）女房の立場なのである。

総じて、この紫式部日記中の全記事から、単に内省的な性格だけでなく、身分も低く、年もとり、不器量な女房としての慎重でひかえめな式部の生活意識を読みとらねばならないであろう。内省的ということも、この式部の年齢や身分や容姿などを考慮してこそ生きた意味・相貌を見せるであろう。言いかえれば、式部の後宮における位置・姿というものを考えようとするのである。

「男だに、ざえがりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」と言われて、「一といふ文字をだに書きわたしはべらず」というような極端に神経質な抑制と鞘晦ぶり、「日本紀の御局」とあだなし言いふらしているのを聞いてからは、人前では屏風の上部に書いてある漢詩も読まないふりをし、中宮への楽府進講も人目をさける、というところには、いじけた式部の姿がうかがわれる。

彰子の後宮の雰囲気、何とも文化的に閉鎖的な、そして、俗っぽく陰険な空気こそ、式部をして孤独感と宮仕え嫌悪におとしいれた根源であった事情がほぼ浮彫りできたと思う。

「すべて世の中、ことわざしげく、うきものにはべりけり」という式部の言葉は、こうした後宮生活に対する総括的な暗い感懐であったと言えよう。

## 三

輝くばかりにけんらんたる彰子の後宮の外面の美しさに、ふと眩惑されかねまじき式部ではあったが、後宮の内面の陰険な人間関係のもたらす俗っぽさに対する限りない嫌悪の感情に苦しんでいるわけである。

それだけに、彼女の神経をやわらげ、むしろ彼女がいたわりたくなるような、高貴にして優雅な神経と感情の持主に対しては、人一倍の好意を寄せたのであった。

式部が非常に親しくしていた女房は、周知のごとく、宰相の君、大納言の君、小少将の君たちであって、中でもいちばん深く親愛の情を寄せていたのは小少将の君であった。

式部が好意を寄せたこれらの人たちを少しく分析し、式部が好意を抱いたゆえんを考え、その心象風景をのぞいてみよう。

宰相の君は大納言藤原道綱の娘、豊子である。

「上よりおる道に、弁の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、昼寝したまへるほどなりけり。萩、紫苑、いろいろのきぬに、濃きが、うちめことなるを、上に着て、顔はひきいれて、すずりのほこに枕して、ふしたまへるひたひつき、いとらうたげになまめかし。絵にかきたるものの姫君の心地すれば、口おほひをひきやりて、『物語の女の心地もしたまへるかな』といふに、見あげて、『物ぐるほしの御さまや、寝たる人を、心なくおどろかすものか』とて、少し起きあがりたまへる顔の、うち赤みたまへるなど、こまかに、をかしうこそはべりしか。おほかたもよき人の、をりからに、またこよなく、まさるわざなりけり。』。式部のような陰気で引込思案で慎重な人間が、何とも羽目はずしたいたずらをしている。

これは心を許した親しい間柄なればこそだが、「物語の女」を感じさせるロマンティックな美しさに強く惹かれた衝動でもあったろう。ロマンティックな美しさに惹かれるのは、俗っぽい現実の人間たちへの嫌悪と表裏する心である。

土御門邸への行幸の日の宰相の君を「『いとけさうに、はしたなきこち

しつる』と、げにおもてうち赤みてゐたまへる顔、こまかに、をかしげなり。きぬのいろも、人よりけに着はやしたまへり」と描写しているが、「こまかに、をかしげなり」——かわいらしく美しい風情——とは、匂うようなロマンティックな美貌をうかがわせる。

「いとをかしげに髪なども、つねよりつくろひまして、やうだいもてなし、らうらうじくをかし。ただちよきほどに、ふくらかなる人の、顔いとこまかに、にほひをかしげなり。」。背たけも高からず低からず、何よりもふっくりとして上品であるのが、やわらかな人柄を思わせ、ロマンティックな感情をさそう美人であったことをうかがわせる。

そして、容姿の気品があって優雅であるのとあいまって、人間的にデリケートな神経の人でもあったようである。

「宰相の君のをぎ人に、ゑいかうをそへたるに、夜ひとよ、ののしりあかして、こえもかれにけり。」。物のけが大きいこのりうつるということは、神経の繊細な人物だったことを思わせるのである。

大納言の君は源時通の娘、簾子。倫子の姪、中宮彰子の従妹である。

大納言の君も式部が仲よく話しあいむつびあった人だった。里居したとき式部は、「大納言の君の、よるよるは御前にいと近うふしたまひつつ、物語りしたまひしけはひの恋しきも、なほ世にしたがふ心か」となつかしんでいる。「うきねせし水の上のみこひしくて鴨のうはげにさえぞおとらぬ」と式部が贈った歌に対し、「うちはらふ友なきころの寝ざめにはつがひし鴛鴦ぞよはに恋しき」と返歌した人であった。羽の上におく夜の霜を、たがいに払いあって落とすおし鳥のむつまじき仲であったのである。

この人を式部は次のように評している。

「大納言の君は、いとささやかに、ちひさしいふべきかたなる人の、白ううつくしげに、つぶつぶとこえたるが、うはべはいとそびやかに、髪、たけに三寸ばかりあまりたる裾つき、かんざしなどぞ、すべて似るものなく、こまかにうつくしき。顔もいとらうらうしく、もてなしなどらうたげに、な

よびかなり。容姿、人柄について、「うつくし」、「らうらうし」、「らうたし」、「なよびか」という評語であらわしている。上品でかわいい、しなやかな人であり、小さくふとっているが、見たところ背が高く見えるというのは、小さいなりに均整のとれたスタイルのよい人だったということなのであろう。髪長さ・かたちは「すべて似るものなくこまかにうつくしき」と絶讃している。

小少将の君は源雅信の四男左大弁扶義（時通の兄）の娘。倫子の姪、中宮彰子の従妹である。大納言の君と従姉関係になる。

小少将の君は式部が最も親しくしていた人で、「ふたりのつぼね」を一つにあわせて暮らすような、やや異常とってよいほど親愛の情を寄せていた間柄であった。

前に、式部が右馬の中将与車に同乗して、身分のよくない者と乗ったといやな顔をされ、宮仕えのわずらわしさをなげいたことを述べたが、そうした宮仕えのつらさを語りあったのも小少将の君であった。「細段の三の口に入りて臥したれば、小少将の君もおはして、なほ、かかるありさまのうきことをかたらひつつ」——なのであった。

「小少将の君の、いとあてに、をかしげにて、世をうしと思ひしみてゐたまへるを見はべるなり。父君よりことはじまりて、人のほどよりは、さいはひの、こよなくおくれたまへるなめりかし」。——この薄幸の境遇は島津久基博士も指摘されたように、<sup>1)</sup> 夕顔の境遇のモデルとされたと考えられるものであり、式部はこの薄幸な境遇に深い同情を寄せているのである。薄幸といひ夕顔のモデルといったが、小少将の君は夭折したらしいことが、次の式部の歌によって考えられている。

「小少将の君の書きたまへる打ち解け文の、物のなかなるを見つけて、加賀少納言のもとに 暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつは悲しき たれか世にながらへてみん書きとめしあとは消えせぬ形見なれども」。

註1) 「源氏物語新考」 37頁と89頁。

式部の厭世的感情は、この不幸な小少将の君との間に、共通な感情のかけはしをわたしていくことが多かったのであろう。「世をうしと思ひしみて」いる小少将の姿に深い同情を寄せたのである。

さて、式部の小少将に対する人物評は次のごとくである。

「小少将の君は、そこはかとなく、あてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳のさましたり。やうだい、いとうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなども、わが心とは思ひとるかたもなきやうに、ものづつみをし、いと世をはじらひ、あまり見ぐるしきまで、こめいたまへり。腹きたなき人、あしざまにもてなし、いひつぐる人あらば、やがてそれに思ひいりて、身をもうしなひつべく、あえかに、わりなきところついたまへるぞ、あまりうしろめたげなる。」

「あてになまめかし」、「うつくし」、「こめく」、「あえか」といった形容語によって特徴的にあらわされている。上品で優雅、かわいらしく、ひかえめな性質で、自分の意志がないかのように子供っぽくて、神経が細くて、何か頼りない感じがする、というのである。

「二月ばかりのしだり柳のさましたり」という容姿は、既に指摘されているように、源氏物語若菜下巻の女三の宮の容姿のモデルとされているようである。「人よりけに小さく、うつくしげにて、ただ御衣のみある心地す。にほひやかなる方はおくれて、ただいとあてやかに、をかしく、二月の中の十日ばかりの青柳の、わづかにしだりはじめたらむ心地して、鶯の羽風にも乱れぬべく、あえかに見えたまふ」と描写されている女三の宮の容姿と類似していることは確かである。かって 島津久基博士が、容姿は女三の宮に相似し、性格境遇は夕顔に相似していると言われた<sup>1)</sup>とおриだと思ふ。ただ、女三の宮は容姿だけでなく性格も類似しているとすべきであろう。森本茂氏は、夕顔より女三の宮のモデルとすべきだと言われている。<sup>2)</sup>

が、本稿の意図はそうしたモデル論、比較論にはない。

註1) 「源氏物語新考」37頁と89頁。

註2) 「女三の宮のモデルについて」(平安文学研究第十九輯)。

紫式部が小少将の君のような人柄を愛したことで、その人柄と類似する夕顔や女三の宮、さらには浮舟という女性像を源氏物語において創造していった意義の深さととの連関に興味をいただくのである。本稿の研究テーマは、実はそこにあるのである。

さてその意味で、式部が仲のよかった三人には共通する性格があることに注意したいのである。

「物語の女の心地もしたまへるかな」と評した宰相の君のロマンティックな美しさ。「顔もいとらうらしく、もてなしなどらうたげに、なよびかなり」と評した「なよびかな」大納言の君。「二月ばかりのしだり柳のさましたり」と評した優雅繊弱の美の小少将の君。みなひとしくロマンティックな美しさにおいて共通していることが注意せられるのである。宰相の君を「物語の女の心地もしたまへるかな」と評したが、三人ともに物語の女主人公にしたいようなロマン的性格を具有しているわけであって、式部の好意・好感は、このロマン的な彼女らの性格、言いかえれば、非俗物性に対して寄せられたのだと推断することができよう。

左衛門の内侍や右馬の中将らのかく神経をいらだたせる俗物性になやんだ式部は、これら三人のふくらかでなよびかな精神、ロマン的性格に、わずらわしい宮仕え生活における慰め、精神の安らぎを感じていたであろうことが十分に察せられるのである。

一の字という文字すら書かぬという韜晦ぶりを示す神経質な式部は、自分より以上に繊弱な神経をもつ小少将の君に対しては、限りないとしみの情、愛情を寄せずにはいられなかった。後宮の俗物たちの荒い神経の持主には「身をもうしない」そんな、あえかな神経の小少将の君を、かばってあげたいという、妹に対する姉のような心情を抱かざるをえなかったのである。

小少将の君が神経の細い人であったことは式部の人物評に見られるごとくだが、宰相の君も、物のけがひどくついてはなれないといった点に、やはり神経の細い人であったことがうかがわれ、性格の類似を見るのである。

総じて、上品、優雅で、かわいらしい人柄、デリケートでなよびかな神経

の持主という点で三者は共通しているが、これをロマン的性格と呼ぶことができようか。

#### 四

式部の宮仕え生活の俗世的なわずらわしさの中にこの三人の像を浮彫りするとき、それは式部にとって本質的な意味での人生の友であり、人間的連帯感を有しうる人たちであったことが明白に理解できるのである。

源氏物語の多くの人物像が、式部自身の人生のいかなる心象のきわみから創出せしめられているものなのか、という問題については、つとに島津久基博士が「源氏物語に描く作者の自画像のいろいろ」（『源氏物語新考』）においてすぐれた観点を示していられる。

紫上を「かくありたき」作者、明石上を「かくある」作者というふうにされた観点からするとき、夕顔、女三の宮、浮舟という系列の女性像は、式部のロマン的好尚を反映する最も物語的な（現実的・日常的でないという意味）女主人公の像であったと評しえようか。

源氏物語の世界を、女主人公を中心とした物語単元にわかち呼ぶとき、写実的世界をはなれた、作者の創作理念のいちじるしくうち出された物語は、実にいみじくも夕顔物語、女三の宮物語、浮舟物語でなかったか。

夕顔物語は、光る源氏と夕顔が、互に身分等の社会的羈絆を隠した状況設定のもとに、男と女のまことにローマン的恋愛の世界を現出する。某院の物のけの出現と夕顔の急死等、怪奇性の強い、ローマン的な物語である。

これは、源氏物語全篇の中でも、作者のローマン的好尚のいちじるしく發揮された物語のひとつである。

葵上や六条御息所と正反対な性格、「あてはかにこめかしく」「らうたく」「なよなよとして」ひたすらに「うちとけ」したがってくる心の、はかなくも純一な美しさ。それは、はじめは漁色的な態度から出発したにちがいない源氏をして、盲目的な情熱と執着にいたらしめたものであり、作者がこの女性像をもって、いかに愛というものを導き出す心性として価値づけていたかを考えさせるのである。

愛情のクライマックスにおける夕顔の急死は、源氏の熱愛の感情を悲劇的な悲しみにつきおとす。しかし、そのことによって、彼の心に夕顔の面影がやきついたのである。いわば一刹那の愛の純粋性は、永遠の慕情と化しえたのであった。

末摘花巻冒頭にのべているごとく、「思へどもなほあかざりし夕顔の露におくれしほどの心地を、年月ふれどおぼしわすれず」なのであった。

末摘花が荒廃せる邸に住む姫君として、源氏の心をひきつけたのも、この夕顔への慕情に起因していることは、この語り出しの文章によっても明らかであろう。

また、はるか年をへだてて、夕顔の遺児玉鬘の物語をえがくに際しても、「年月へだたりぬれど、あかざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず」と語り出し、「心々なる人のありさまどもを、見たまひかさぬるにつけても、あらましかばと、あはれに、くちをしうのみ思しいづ。」と、つきせぬ慕情が語られている。「心々なる人」——いろいろな気性の女性——を見ても気にいらないう。夕顔の侍女右近は、もし夕顔在世ならば、源氏の愛情は、明石上には劣りなさらぬであろう、と考えているが、けっして思いすぎではなからう。

中の品の女性中では源氏に最も愛された女性と言うべく、紫上について、源氏の心に深い愛情を抱かしめた女性であると言えよう。

かつ、紫上とは異質な愛の心を、源氏の心にきざみつけたといえるのであり、*「愛の物語」*としての源氏物語中に占める夕顔物語の位置は大きく、構想的にも末摘花物語、玉鬘物語を導き出す心的起因をなしている点見のがしえないものがある。

そうしたことのすべてが、夕顔の心情、人柄——すなわち、小少将ら、式部の愛した人たちの人柄——に動因することは、あらためて深い関心をよびおこすのである。

夕顔物語は、紫式部のローマン的な抒情的精神、詩的心情の産物である。わたくしは、その制作がなされる母胎としての彼女の心象風景を、紫式部日

記にみられる人間関係の分析によってうかがおうと試みたのであった。

女三の宮創造は、源氏物語第二部の重要なモメントをなすものであり、女三の宮と柏木の事件の悲劇的な運命が、女三の宮の人柄に起因することの大きさは、わたくしも分析したことがある。<sup>1)</sup>

女三の宮と柏木の悲劇的な心象の風景、彼等の人生は、最も物語的な(劇的なという意味で使っている)構想の所産であり、女三の宮と柏木の事件における二人の異常な人物造型は、作者の文学的な創造行為のきわまる頂点を思わせるものがある。つまり作者の虚構的な創造行為——いわゆる写真とはうらはらな——の深淵をうかがわせるものである。この作者の悲劇的感覚は、紫式部日記にうかがわれる式部の厭世的感情、われひとともに不幸な運命のもつ詩的構造への本質的沈潜において、その創造の豊かな源泉を得たと言えよう。

女三の宮の出家という課題を主題としてすえ直したとき、浮舟物語の主題がはじまった。

軽々しいところのある性格、「らうたく」、なびきやすい性格、夕顔や女三の宮の系列上の性格美が、浮舟の悲劇を起こしていく。

悲劇というものの感覚が、女人の受苦というものの本質において語られた。

夕顔、女三の宮、浮舟の三人の女性像をめぐる物語は、悲劇的な感覚のきわやかなローマン性として、限りもなく作者の詩的ローマン性をあらわすものであった。

本稿は、そうした作者の感覚、詩的精神のよってくるところを、紫式部日記に求めさぐるうとし、式部の宮仕え生活の人間関係を浮彫りすることによって、式部の人間的好尚とそのよってくるゆえんを知ろうとつとめたのであ

註1) 拙稿「源氏物語第二部の主題性について——女三の宮降嫁の事件——」  
(「国文学攷」昭和35年5月)

および、拙稿「女三の宮事件の主題性について——柏木との事件  
に関する一考察——」(「国語国文」昭和35年11月)。

った。

そして、源氏物語における人物創造との関連を考えたわけであるが、与えられた紙幅もはるかに超過していることでもあり、それについては概要を述べるにとどまった。詳細は改めて稿をつぎたいと思う。